



吉海原稿
身九号

洋学文庫
文庫 8
A 149
15



118
199
(15)

お

言海原稿

第九号

大正十年十月廿日綴



大槻文庫

おいらばうばう 老女房 夫より年上、妻 畧シテおいらよ。

おいらによ 老女房ノ畧。

おいらぬ 河大徳川將軍家ノ奥向ニ仕立少女ノ稱、おいら子供トモフ

おいらひと 老人 年老イタル人トモヨリ。皇極紀 老人 万、十六、廿一老人

モ女ノ尊見モ

おいらどれ 名 一老ヤ湯ニ登ミタルカおよづレト同根、語也 老イボレタコト、

おいらさる 湯家様 中寄ノ家ノ妻ノ敬稱(大坂)

おいらやう 湯家様(湯家流)おいらう(傳見)

おいらさうとう 湯家騷馬 江戸時代、諸大名ノ家ニ在ル内江、黒田

騷馬加賀騷馬 伊達騷馬ヲシテ是ナリ 芝居狂言ニテコレヲ仕組

ミテ演ズルヲ湯家物トシテ(時代物ノ傳見)

おいらもの 湯家物 おいらさうとう 湯家騷馬ノ傳

おいら (代) 己對 一おいらノ畧、おれおらノ轉、自稱ノ代名詞、ワレ

ラ。(東京)

おいら名 名ニ花魁 一己對ノ轉、新造、禿ナド、其婦女身ヲおいらノ所

ノ姉サシト云フキヲおいらト云ヒ又畧シテおいらト云ヒナラハ

江戸新吉原所ノ遊女ノ稱、京坂ニテ大夫ト云ヒシハ

一世事物者、新造元祿中、新吉原仲ノ所ニ遊女ト云ヒ櫻ヲ多ク植エ

リ其時岸田屋 何某ノ禿ノ白、おいらガイナマ 咲ク櫻カサ(おいらガ

姉女身ノ植エス 櫻ガイナバンヨク 咲ク) 昔此時ヨリ大夫おいらト

稱スルニ(近世事物者) 其保十、年浅草寺、櫻ヲ多ク植フ物也

遇ヘル時トトニ世及スル聲。おお其事耳」おおコハイ

おおさん 〔意〕御摺押 相争イ我ニサムトス 益ヲ折テ重ネテ又飲マシ

ムルエト敬禮。

オオゲストラ 〔英語 Orchestra〕管弦の舞踊

オオリテエ 〔權威ハ英語 Authority〕

おおそれちぢワ 〔副〕乍御懸 農レオホハ候ヘト云。長川本、平家二九

「おおそれるから君モ悔レタリ渡ラセヨムズラ」新撰大衆海集。

秋「おおそれるから」入レテコト見レ「足洗フ鯉ノ水ニ月サレテ」

おいかか 〔鯉竹節ハツをズレシ首首ノ三重ネテおヨ冠ヲ見レ〕

鯉竹節ノ小兒婦人後世身詢

おかし 〔漸徒 徒侍ノ累敬稱。〕

おかしん 〔漸ノ小兒婦人語。モヤ。〕

おかしん 〔カラかうの幼〕香の物ノ小兒婦人語。其條ヲ見ヨ

おかつさま 〔御方様ハおかつさまノ音便。おかつ(御方)ノ(三)ヲ見ヨ〕

度人ノ妻ノ尊稱。オカミサン。狂言記。釣女「おかつさま」今モ甲斐文藝社

本雲ニテ此語ヲ由ルヲおかつファント云フ

おがひき 〔大鋸 木挽ニヨリ 森道聖判職人歌合「おがひき」

不目みまき 〔御登括ハ絹布ノ服ヲ被テ着目ル意〕

〔金満奉ノ禮着錦リテアル生活ヲ云フ意〕(一)火六山ノ高貴大ロ

おかし 〔御株〕(一)かぶらちまノ意(二)其人ノ得手トスル行爲(三)

常習之癖

おきかま 御金(二)金ヲ丁寧ニ味フ語(三)死火山ノ舊噴火口

ニ水ヲ湛ヘタル所ノ稱 形多クハ圓クシテ金ノ如シ山神ノ御金(ト云フ)

兀(レ)云(三)男色。(及テおきかまト云ヒタル也)

おきかまヲ興ス 俄ニ財産ヲ得(耶巨カ金ヲ握起シテルヨリ云フ

語ナルベシ

おきかま 湖上天子 官尊長 夫人トシ尊稱

おきかま 湖上様 東京ニテ所家ノ妻ヲ敬稱

おきかま(名) おきかま 白雲 東京ニテ藝者者トシ料理屋ノ妻トシテ

稱スル語(湖上ニ云ヌ又其女主人ヲ云ヌ女將)

おきかま 熾火ノ異其傳具コ

おきかま 熾火(ハおきかまノ約)神武紀。取(サ)免田川水以灌其(火)火

炭火ノ赤クオリ名モノ 字鏡六 煨 於(又)比 倭名抄十二 煨 煨

熾 熾火也 於(比) 雲五異記中 第六 熾 於(比) 同下 第四十 熾

於(又)比 信明集 手(サ)サビニ 火挿 におきかま割リテ云 並ヒニキ人ニ 各(又)

煨カナ

おきかま 他(口) 起明眼(ス)ニ 夜ヲアカス 後撰ノ秋下 我(カ)カ

物思ヒケラレ 白雲ノ夜ヲイタツラ におきかまシツツ

おきかま におきかま におきかま におきかま

おきかま 沖掛 船 陸ヨリ遠ク碇泊スルコト

おきかふ 他 置換 彼レト此レト換置ク

おきかふ 他 置換 三 おきかふノ口語 三

おきかう 兩冬 三 冬ノ小見婦人語 三 コラシメ。徳心訓「禁足三旨」

おきかへ 置替 質行ヲ別ノ質種ニ易テ預ク

おきじ 置字 小措ク直ルニ止 漢文ヲ訓ニ讀スルニ措キテ讀マヌ

也。焉。矢。等ノ助字。神武紀。是役也。天皇志存必克

重仁化五年十月今日夢也。必是東應焉

おきじやうり 置洋瑠璃 前置 意ナラシム 廿之居ノ幕明キテ後

者 神 其狂事 解語ル洋瑠璃ノ一段落

おきへい 漢 津津澤 一沖之澤義 海水ノ澤 神代紀下 憶企

柳茂 漢 寄レトモ 荒磯 玉澤 眞津澤

おきつもの 漢 津津澤 一沖津澤 水 隠リ又ハ水 麻ク

隠る 麻クノ枕詞 万一サ 吾ガ夫子 何所行クラム 已津物 隠

山ヲ今日カ越エラム 已 起 直下 隠ハ伊賀ノ地名 張ニカク 同十一

一 眞津ノ麻ギレ君カ言待ツ吾ヲ

おきづり 沖釣 海上ニ出テ 釣スルヲ 陸釣ト云ス

おきどけ 置時計 柵床ナド 据エオク時計 懸時計 懐中

時計ナト云ス

おきて 名 撰 二 オキツルコト 一 サダメトリキメ 源 五 親 おきて

タカヘリト思ヒナゲキテ 源 源の少女 五 水ノオモ

カ山ノおきてヲアラタメテ 三 定メオク法則 法度ノ條目 法則

雄略紀 ハハ 賞罰支度 オキテ 四手物語 ハハ 君ト臣ト おきてニ

ク 建武元年 若菜 鎌倉ノ右大将 撰

おきて ハハ 置手紙 書置 意 主人不在ナド 用事ノ旨

ヲ記シテ置キ去ル手紙

おきて 置戸 置 オキト 義 置座 同レカルレ

神代紀上 ハハ 諸神降臨過テ 素戔嗚尊

而科之 以 座置 戸 遂促 徴 矣

おきて ウ みにし 奥津御年 一年 稲 義 其條 見

晩稻 稲 稲 新 祚年 掌祀 記 取リ作 奥津御年 八束穂

嚴穂 皇神 依サレ 奉ラハ

おきて ハハ 翁人 大成 人 畧 カ おと ち おみ ち 或 息長 人 畧ナリト

モ云フ 継体 紀 中 此云 那 倭 名抄 豊 後 國 日 高 郡 比 多

年 老 イタル 人 常 畧シテ おきて ト 云フ 其條 見 公 刊

倭 名 抄 二 三 一 遊仙 堂 座 云 古 老 於 政 奈 比 止 半 依 月 日 其 事 子 成

十 本 畧 女 十 棟 草 子 五 ソ 信 ナル おきて ハハ 打 千 打 千 打 千 打

ト云カクモ云ハヌラ

おきふり 自四 起伏 起キテ伏シタリス。後拾遺。秋上、秋風折
レシトスマフ女高女幾クモ野辺。おきふレヌラシ

おきふり 世四 置屋

おきふり 置屋 遊女ヲ抱ヘ置クヲ家業シタルノ(京坂)

おきふり 湖老(三) 女 敬語(三) 月 經(婦人 隱語)

おきふり 湖老(一) 女 敬語(一) 月 經(婦人 隱語) (東京)

おきふり 湖老(一) 女 敬語(一) 月 經(婦人 隱語) (東京) 空ろノ例、如シ

(二) 奥深 廣大ナルヲ 奥深 廣大ナルヲ 奥深ヤコト 廣大無量。

欽明紀六年九月、造又ニ其功德甚大(左訓、オイヤリ) 易經

繫辭、聖人有以見天下之顯、疏顯謂迷深難見(三) ④

假名遣、
おきふり
ヲ見ヨ

④ 甚レキテ、非常。太平記廿五、竹筒第五也、一足モ退カス討

死ス(一) 神水ヲ飲ミテソ打立ケケル、事ノ顯、實ニ思ヤリテ體カ

ナト先ツ涼シクソ見エタケル

おきふり 形一 顯(一) おきふり 條ヲ見ヨナルハ 甚レキ義

極メテ廣シ。廣大ナル。一五廿五、ソキタクモ 於藝名奈伎カモコキバクモ

寛ケキカモ(難波海ノ廣ク寛ナルヲ云フ)

おきふり 漸氣文之 漸氣年ノ毒ノ婦人ノ文ノ詞

おきふり 置列一 盜ニシテ後、何車ヲ置キテ暫時立去レル間ニ

其何ソ盗ニ去ルコト

おきふり 自上ニ 起伎一朝ニ持床 起キニケカル。袂衣、三中、マダ

知ニテ賤平路ニおまわひテハ旨立ツ事務ニマヨスルカテ

おかいもじ 御母文字 御母様ノ婦人等。院本、大内裏、大友、真鳥

(重保、竹田、本宿)「サテモキツイ麟波、ユレテス御家老ノおかいもじ殿」

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

中事枚未成

おくらう 奥家老 貴族ノ奥方ニ奉務ラセル職

おくらん 名

おくらん 臆足 オビテノミニニ 臆測 見成

おくらん 奥小姓 一貴族ノ奥方ニ奉ル小姓

おくらん 奥沙汰 貴族ノ奥方ノ任ル建物

おくらん 奥様 一奥方ニ義 奥方ト意同ジ 奥方ニ同ジ オクサン

狂言記 皇塗 太皇太后ノ大名ニ 由國許ヘ下ラセテ 美シイ奥様

ニ 御目ニカカラセラレタラハズニ 一代女(貞重)ニ 猫云々奥様ノ御

髪ニ格キツキ

おくらん 奥様 前條ノ音便

(三) 生き残り。死シ後ノ源ノヨ木ニ是レ故ニ其ノ智ヲ未レ子
云々 云々 御ノホドニおぬれハベリテシ千載。哀傷ノ女ニおぬれテシ難キハル
頃(三)後ニテル。遅クテル。(時ニテ) 後(四)外ニテシ残りハ伴ハズ。及バズ。
其ノ後ニ同行ニ後ニ流行ニ後ニ(五) 劣ル。次ノモノトナル。別ノ源ノ
空蟬五。スヨシロハおぬれタリ。扱テ上ニ。心ヲツクス人々。高キモチク
れモサマサマニ(六)短クテアリ。源ノ葵ノ。新ノ歌ハスコニ短クテ
アメルヲムゲニおぬレタンステオキヤ」名詞ニ「おぬれ毛」(七)臆ス。氣オクレ
ス。思緒

おぬれ(五) 後ノ口語

おぬり(六) 送出 相模ノ手ノ名 相手ノ手ヲ在傳込ミノのめニツケル
ガ体ヲカハセテ 相手ノ背ヲハキキ 押出スニト

おぬれ(七) 湯管蓋一 大常茶時主上通立及ヨリ 悠キ紀院主主
其ノ後ニ御時殿洞ニマサレル湯也也。御宮礼拜ニ用井ノ也也
其ノ口ヨリ紐ニテテ釣ル左右。細クテテ持ツル也
万土九三大君ノ湯也也。結ハ有馬也也
踏祚大常式一 車持朝臣一人 執事官蓋子都有祿一人 登
取直一人 並執差綱

おぬれ(八) 湯管蓋一 大常茶時主上通立及ヨリ 悠キ紀院主主
其ノ後ニ御時殿洞ニマサレル湯也也。御宮礼拜ニ用井ノ也也
其ノ口ヨリ紐ニテテ釣ル左右。細クテテ持ツル也
万土九三大君ノ湯也也。結ハ有馬也也
踏祚大常式一 車持朝臣一人 執事官蓋子都有祿一人 登
取直一人 並執差綱

おぬれ(九) 湯管蓋一 大常茶時主上通立及ヨリ 悠キ紀院主主
其ノ後ニ御時殿洞ニマサレル湯也也。御宮礼拜ニ用井ノ也也
其ノ口ヨリ紐ニテテ釣ル左右。細クテテ持ツル也
万土九三大君ノ湯也也。結ハ有馬也也
踏祚大常式一 車持朝臣一人 執事官蓋子都有祿一人 登
取直一人 並執差綱

おぬれ(十) 湯管蓋一 大常茶時主上通立及ヨリ 悠キ紀院主主
其ノ後ニ御時殿洞ニマサレル湯也也。御宮礼拜ニ用井ノ也也
其ノ口ヨリ紐ニテテ釣ル左右。細クテテ持ツル也
万土九三大君ノ湯也也。結ハ有馬也也
踏祚大常式一 車持朝臣一人 執事官蓋子都有祿一人 登
取直一人 並執差綱

二子ノ色モ変ハルニカク

お、六也「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

知、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清小者」将軍ニ近侍スル少年

お、六也ハ「清蘆」社寺ノ奉仕者ヲ言フ也

お、六也「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

行事「清蘆」資益王○記明徳十年正月、お、六也ハ、（元寇ノ恩）

侍、（元寇ノ恩）

侍、（元寇ノ恩）

小見ノ持ルニ云フ也

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

お、六也ハ「清蘆」ハ、（元寇ノ恩）

おぼめく 自 春 春 動 動 へうぶめく 轉 く おぼく

うぶめく 同ジ。ウゴウゴト動ク。源書木九 東 見 見 おぼめ

源 源 書 書 木 木 九 九 東 見 見 おぼめ

源 源 書 書 木 木 九 九 東 見 見 おぼめ

源 源 書 書 木 木 九 九 東 見 見 おぼめ

源 源 書 書 木 木 九 九 東 見 見 おぼめ

源 源 書 書 木 木 九 九 東 見 見 おぼめ

源 源 書 書 木 木 九 九 東 見 見 おぼめ

源 源 書 書 木 木 九 九 東 見 見 おぼめ

おぼめく

おぼめく 神佛ノ供物ヲ取テ下ケルモノ 三 貴人ノ供膳

おぼめく 神佛ノ供物ヲ取テ下ケルモノ 三 貴人ノ供膳

おぼめく 神佛ノ供物ヲ取テ下ケルモノ 三 貴人ノ供膳

おぼめく 神佛ノ供物ヲ取テ下ケルモノ 三 貴人ノ供膳

おぼめく 神佛ノ供物ヲ取テ下ケルモノ 三 貴人ノ供膳

おぼめく 神佛ノ供物ヲ取テ下ケルモノ 三 貴人ノ供膳

おぼめく 神佛ノ供物ヲ取テ下ケルモノ 三 貴人ノ供膳

おぼめく 神佛ノ供物ヲ取テ下ケルモノ 三 貴人ノ供膳

今云云凡例月三日ノ内ニ降ル雨ヲ吉瑞トシ禪才屋月集ニ
出ツ云ニ有朝日雨降リケルニ「おぼめく」ト云ム小春、時雨
カテ 総也 是ニ有朝日雨降リケルニ「おぼめく」ト云ム小春、時雨

おさふ 他下ニ抑^押し支^サつ^支の^ノ約^ヨ志^シと^ト、假名遣おさ^サヲ見^ミ」

(二) オエトム支^サフ。万十三^サ、黄楊ノ小楯ヲ抑^サヘサ^サ名義抄

抑^サ屋^ノオサ^シ (三) 堪^トヘ忍^ズ、涙^ヲ折^リ怒^ヲ折^リ (三) 抑^フ

「盗賊ヲ抑^フ」 (四) 取^リテ重^カサス。證^ヲ抑^テ他^ノ財^ヲ奪^テ抑^フ

(五) 敵^ササレヌル^ヲ止^メテ再^ビ飲^マシ

おさだう 御茶道一江戸幕府^中ノ茶坊主

おさい 湯^サ菜^ノ葷^ノ婦人^ヲオカス。

おさう 湯^ノ草^一草履^ノ取[。] (嬉^シ笑^ハ喚^九)

おさへ 抑^附捕^テ重^カサス。

おし 御師^一湯師^要御^所湯坊^主

(二) 祈^師敬^稱源^ノ玉^夢ニ^サ右^近ガ^石佛^ノ古^方ニ^近キ^間ニ^シ

ク此^ノ湯師^ハ云^ハハ^クノ^レ見^ル

(三) 神社^ニ移^リテ祈^禱師^ノ敬^稱ス。吾^妻鏡^ノ。年^々湯

祈^禱師^權祈^耳光^親神^主渡^命延^延隨^等弘^安之^年公^卿勅

使^記ヲ^引キテ^ハ風^雨之^難云^ニ殊^可祈^請之^旨可^仰本^言湯^師并

祭^主古^主云^ニ湯^師ハ^大夫^卿稱^ス家^忠日^記天^正三年^三月^一日

い^せのおし^湯候^草毛^ノ馬^取之^候後^ニ大^神宮^下幕^ノ中^ニ

人^ニ其^太夫^ト稱^スル^者ヲ^おし^又お^し唱^ヘ湯^被箱^ヲ國^々人^家ニ

配^リ初^穂ヲ^求メ^僧寺^ノ飯^檀ノ^如ク^リシ^カバ^各地^{ヨリ}冬^宮ヲ^見ル

おし
おし
おし

田
✓

源宿木
侍中群要三、初侍御膳
人先取茶を懸入、注免問御障子之間、續言、
其詞、おし、林草子、一、一、書、御座、方、
けいひのナド、おし、ト、ラ、御座、御座、

源宿木
御座、おし、孟ラ、御座、上、宣、ル、鬼、間、通、入、
障子、入、入、入、陪、膳、膳、膳、膳、ト、ト、ト、ト、

日中行事

あけかた、同じ。カカッキ。腕源。柳、おし、あかた、月影、法
師、ハ、關、伽、奉、ル

おし、た、押板、三、貫、障、座敷、板、張、床、間、

曾我物語、十、追、善、
物、波、三、五、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

三、後、三、机、大、キ、ホ、ド、板、依、キ、勝、アル、ナ、ド、製、箱、々、り、室、中、ニ、置、キ、テ
文、房、具、其、外、物、ヲ、用、休、リ、オ、ク、基、ト、ス、甲、陽、軍、鑑、十、九、五、十、一、品
武、田、清、重、代、左、文、字、ノ、御、腰、物、ヲ、お、し、た、上、ニ、立、テ、オ、キ、マ、フ
お、し、た、し、ぎ、ぬ、押、出、衣、女、房、ナ、ド、御、座、外、へ、衣、端、ヲ、出、下、フ、
唐、衣、皆、御、座、外、
お、し、た、さ、し、ぎ、ぬ、雅、其、装、束、抄、三、
お、し、た、し、ぎ、ぬ、お、し、た、し、ぎ、ぬ、三、

内侍
御座
六條、見、ヨ、

△(白河院奏) 聞く多し三巻
 マリカヒテ立
 タマシラレタ
 ルニ降陸大
 神宮ノ新ヲ
 謹ミテケルハ
 至ト上ノ御
 セラケルヲ云
 ナリ

おしおき 押仕置 仕置ノ下章ニシテ復刑罰。専ニ死罪ニシテ。

おしおき 押柄 (押進ノ性質義) (人柄身柄) 後 押柄ト音

誤シテ高シクニトシテ一轉ニ見ナリ

氣ノ張レルコト。キハタカナルコト。オシノツキコト。剛強 舊今昔廿八

廿三話 三條中仙言云々 思慮アリ 肝大クシテ 押柄ニシテ

ケル 縁古事談 一「カヤウニおしからマリテエニシカリ人下」△

おしおき 押柄儀 (一) 辞儀ノ敬禮 (二) 致ラサテ礼スルヲ 枕首

(三) 俗ニ商店ニテ 失敗シテ資力尽キテ閉店スルヲ。

おしおき 他 押消ハソノ消スルヲ 打テ消ス。勢ニテ負カス。壓倒

消ス。勢ハ、上達ニ初ハイト、異ナルヲ一所ノ消光リニおしけたレタリ

おしおき 五五 (一) 五五ノ人名ニシテ 要大臣 昔太良 (八) 五五 次郎

土田三郎ノ教 太良ノ侍ノ見

(二) 唾 オレニ同じ、約シテおしおきトモ云 (慶安ノ嘉多言) 越前ニテ

おしおき (三) 蟬 雌ノ鳴カヌモノ。古事ノオシオキト云

おしおき 唾蟬ノ異名。

おしおき 唾蟬 (一) 鳴カサレバ名トス 古名、ナハセシ。蟬ノ雌

おしおき 下下 貴人ト申シテ 賜ルルヲオシオキト云

おしおき 押太鼓 (一) 押進ノ意 押花ノ (一) 見

軍陣ニ攻メサルベキ相聞ニ打テ太鼓。信長記。敵勢 押太鼓

ヲ打テ懸

(カカリノイコ。ひきかぬニ對ス)

おしつけのいた 押附板 鏡 名所 胴 背面 肩ニタタル所 漆革ナド
 三日月 署名シテオシツケ 盛衰記 三十 夏 盛 被 訂 已レハ 手塚ガ
 印等ニヤ 蘇スフジレ 押附の板ヲツカマハ 平比ニ待 置川一軍
 二ノ矢ヲ射リケレバ 押附ニカケレヨリ 甲 陽 軍 鑑 九上 敵ノおし
 つけ見スバ 武士ヲ多ク取ル 甲 北 守 守レ
 おしちりガゼ 於七 國 流行性感冒ノ終
 一〇〇ノ頃 八百屋お七ノ 放火事件 傳 起シ
 おしち 於七 放火ノ 謹詞 八百屋お七ノ 放火ニ名ニ 因ル (次條ヲ見ヨ)
 おしつまる 自 押語 八おしニ 意ニシ かし謙ニ かし黙ニ 藝 ツマルキハ
 ナル。切迫ス。

おしつむ 世下ニ 押語 強ク押ス。オシツクル。一 壓迫
 おしいで 押手 八古へ 常ニ 墨ヲ 漢リ 文書ヲ 捺シテ 起レル 漢
 手 押印ト云フ 漢モ是レナリ 型印符
 朝慶ニ 文書ノ 認シテ 捺シタコフ 印 仁和 大嘗會ノ 歌 神代ヨリ
 天ノ 於志 豆ノ 再キナキシル 認シテ 山石 屋山カモ 出 崇岐 紀 朝
 延下符 備 續 紀 詔 官符ヲ 押シテ 天ノ下ノ 諸國 散
 此テ 告ケ 知ラシメ 増鏡 十七 月 草ノ 夜 塵ノ 箱ヲ 御身ニ 添ヘラシメ
 ハ 名義 枚一 部 印 オシテ 示ルシ
 おしいで 押手 琴 琴ナドノ 彈込 銘ヲ 押シ 右手ニテ 彈キテ 音ヲ 發セシム
 三ノ 漆ノ 紅梅 九ノ 琴 持包 かしん 三ツヤ ナルヲ ヨキニ 示ルモノナリ

おしやくひ （東草子） 押杵女児の遊戯。細蟬ノ殻ヲ撒キテシ始ノ殻
ニテ杵ヲ取リ其多少ニテ勝負ヲ決ス

おし、まへ （一） 押前 （一） 戦目道 押を （一） 子見

戰場進ロコロ。進軍 武隈昔事話、秀吉進軍、本多忠勝
小勢ヲ日並進シテ、今更ニ秀吉ト戦ヲ挑マハ推前ノ妨ケトナリ

秀吉長久寺ノ駐着ケニ滞リたまヒ （良將道徳教ハ）

おしほん 押四 （一） 四方ノ音使 （一） 押方さんばう （三方ノ條ヲ見ス）

おし子 （信濃） 信濃 （信濃） 江戸ニ信濃ヨリ出テ来ル下女ヲ侮リ呼ビ
詠下界ナルヲ志子助ト云ヒキ。

おし、まへ （他） 押座 押シ座ス、一万十 （一） 我志ノ尾尻押

おし、まへ （他） 押直 （一） 改メニ心シシ坐

おしのひ （清） 微行ノ敬語。

おし、ば （調） 調 （古） 言、オシバ、オシバ、古事記下 （清）

おし、ば （調） 清遠者 如 （三） 枝 押止坐也

おし、ば （押） 草木ノ葉ヲ厚紙ノ間ニ押シハサミ （乾） カシ 儲アルモノ

植物学ノ標本トス。腊葉。

空穂系
一井下
安例
ケレキヨ見テ
イト心見
思ヒテ前
硯ニ平明
ヲヒテ
キテおしやく
みテオイタル

異名オシヤラク大坂ニ終嫁類ニおちらト云アリ
おしヤ水 御洒落 身形ヲ出ル 婦人後オシヤ
おしヤ水 白粉下 白粉下 白粉下 白粉下 白粉下 白粉下
おしヤ水 善ク肌ニノル

おしヤ水 御汁 味噌汁ヲ丁草ニシテ

おしヤ水 他四 押蕪組ハ極ニおしヤ水ニシテモアリ 押シテ巻ク

おしヤ水 白粉焼 鉛製ノ白粉ニ毒セシテ 飲ニ活點ヲ生ジタル

おしヤ水 白粉焼 鉛製ノ白粉ニ毒セシテ 飲ニ活點ヲ生ジタル

モノトコトモ

おしヤ水 おたま 於杉於玉 伊勢ノ山田ノ間山ニシテ 味噌線胡ヲ彈キ

テ神宮參詣人ノ錢ヲシテ少女ニ換

風流旅日記(貞享) 間ノ山お杉お玉ガ庵前ニ紅綱ヲ張り 味噌線

引キ小歌ニ參宮ノ者錢ヲオツシ 殿ニアタテス(棹ニ受テ止ルナリ 嬉遊

笑腹七)

おしヤ水 朝鮮語ニ衣ヲおまト云

眼ノ名 上代ニ男女同サリ 頭ヨリ被リテ衣管表ノ上ヲ被フモノト云フ 面ヲ掩

ヒテ隠スニ用サレシ 十事記上ハ三十一 大刀ガ緒ヲ未ダ解カステ 涙涙

ヒトモ未ダ解カネバ(八千早神ノ 瀬川 源世埋媛ノ家ニ夜行ノ時ナリ)

同中(景行) 五十 美夜受媛ノ意欲比ノ裾ノ下(仁連) 十 速足別王ノ

おす 他四 押推 (二) カヲ用キテ彼方へ遣ル。天治字鏡十五、押赤
瀬 (三) 船ヲツカヒテ舟ヲ遣ル。瀬源。玉葛。例ノ舟子トモ、からとまり
ヨリ川尻お花ホトシ

(三) 軍陣ノ護進 軍勢ヲ進ム。甲陽軍鑑土上。品。其後ニ
押推ニツキ七段モ相傳ヒ。おす (武者押
寄ス。押シテ行ク)

天治字鏡十五、押赤瀬
押推ニツキ七段モ相傳ヒ
おす (武者押寄ス。押シテ行ク)
押推ニツキ七段モ相傳ヒ
おす (武者押寄ス。押シテ行ク)
押推ニツキ七段モ相傳ヒ
おす (武者押寄ス。押シテ行ク)

10 根岸 委むらや製

押推
おす
瀬

おすまひ 押推 (二) 住ひノ故語 (三) 押守殿ノ條ヲ見ヨ。
おすめいり 押守田島 (一) 鈿女命ニ起テ強悍キ義 (おすレノ條
ヲ見ヨ) 兩雅雨雅澤澤常存津人ヲ見テ去ニシト云々
島名、みそぶカノ古名。字鏡ニ「押守田島、天治女島」傳名抄十八
六、澤澤廣護田島也。常在澤中見人輒鳴不去。新
官故以名之 (下線本、義注七、八)
於漢書止里 扶桑略記廿四、延長六年六月十八、白女島集
南殿殿位南、字類抄、押守田島、六、易林、常用 (慶長護田島
ウズバ)
おす、おし 瀬源、おす、婦人徳

ウズドモ
ス
轉

おす 他四 押推 (二) カヲ用キテ彼方へ遣ル。天治字鏡十五、押水

酒 (三) 船ヲツカヒテ舟ヲ遣ル。盪源ノ玉葛。例ノ舟子トモ、からとまり

ヨリ川尻 おそホトシ

御軍

(三) 軍陣ノ誤通 一軍勢ヲ進ム。甲陽軍鑑土上三十五品「其後」

ツキ山縣(昌景) 押へ候(山縣) ツキ七段モ 岨傳シヒ おそ(武者) 押

押前サ云フ後マ是ナリ 押シ寄ス 押シテ行ク

押水敷
△別ノカード

△轉じておそめよりおそ

澤度

おそまひ 御住 (二) 住ひノ故語 (三) 御守殿ノ條ヲ見ヨ。

おそめより 御護田島 (一) 鈿女命ニ起テ 強悍サキ 義サ (おそレノ條

ヲ見ヨ) 兩雅兩雅澤度 澤在津人ヲ見テ去テ各ト云ルナリト云テ

島ノ名、みそぶカノ古名。字鏡六十一「護田島、亦汝女島」倭名抄十八

六「澤度、護田島也。字在澤中、見人輒鳴不去。新有似主守

官故以名之 (下終本、箋注七、廿)

於浪賣止里

扶桑略記、廿四、延長六年六月十八日、白女島集

南殿版位南「字類抄」護田島、六、易林、常用(慶長護田島

ウズドモ

おそ、まし 御酢文、船ノ婦人徳

おためしヤ「湯考者」おためし(一)ヲ見ヨ

おたむし (輪、形ヲ成スヨリ) 湯盤ハ女、結髪ノ名、毛ニ頂ニ輪ヲ作レルモノ、横ニ竹并ヲ互

ニテ其中央ヲ殘髪ニ卷キ止ム(東京)

おたぶん (南多) 泉議ニ賛成ノ多キ方ニ賛成ス、オサナリ、南多

分ニ漏レズ「オトシ」

おたね、いんじん「湯種人參」人參、條ヲ見ヨ。

おたね 「湯圓」聖天・供物トスル「屋」ニ喜、故云。

おたんちん (多)「牡丹餅面」畧化シテモアル也、丹、女ヲ卑テ呼ブ詠、筑

前博多ニテ云云

おたまり、いほし (名)「起上」法師、語路ナル也、堪ラヌ、泳ヘシヨ、

マント。オンバ。

おち 「湯乳」(一)乳ノ故云、(二)湯乳ノ人(畧)、院本丹波

波世作(寶永近松作)上、湯乳ノ音テ、サ難ニナレバ女ニコソアレ、乳母ガ腰

ヲ切ラヌ、ハナラヌ

おちあし 「サ浴足」(一)頁々テサ浴テユ、足取、平家九ノ、

(二)川水ノ流レキテ減ルニト、平家九守河川、河内路ハヤ廻ルニキ水ノシタ

足ヲ待必キ、(川出水ハテ海ニカスニ至ラ)

おちあゆ 「サ浴」サ浴サビ、あゆニ同シ

おちいたき 「サ浴」サ浴サビ、一段位ク張リタル板ノ間、

石清水放生會記、大外記師曹王、座階、西ノ板者、往南、大床

「招屋筆記」(十六)

手冢持士、
敷テ足ス、
野ニシテ是、
の古トナリ

おちあひのさし 湯茶子(二)茶子ヲ丁寧ニシテ後者ヲオチヤガシ

(三)骨折ラスニ出セルエト。ちあひのさし條ヲ見ヨ

おちあひのさし 湯茶子(一)おちあひノ條ヲ見ヨ。

おちあひのさし 湯茶子(二)おちあひノ條ヲ見ヨ。川柳「おちあひ

沖マテ漕クハ馴染ナリ」

おちあひのさし 湯茶子(三)京都ヲ揚屋下ノ小下婢。

おちあひのさし 湯茶子(四)おちあひノ條ヲ見ヨ。

おちあひのさし 湯茶子(五)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(六)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(七)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

奥

おちあひのさし 湯茶子(八)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(九)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(十)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(十一)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(十二)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(十三)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(十四)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(十五)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(十六)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(十七)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

おちあひのさし 湯茶子(十八)おちあひノ條ヲ見ヨ。打消、即ち河ノ成ぬぬノぬ

末茶マテツル
 事作コト法ホウヲ
 深コソク知チル
 者モノノ程ハジメヨリ
 ツクヒヒテナル
 起オキル語コトニ
 アルカ

おぢ

おぢチヤ「茶茶ノ敬レ語ヲ。茶ヲ丁ニ寧ニシテ後ニ「法茶壺」法茶壺」法茶壺」法茶壺」

おぢチヤヲ濁ス。ツクヒヒトナルシテ。ゴヤカス。瞞カ着ス。末茶マテノ静カニ碾クヲ可シレ

おぢチヤヲ碾ク。茶曰テ末茶マテヲ碾キ作ル。昔ハ間隙ナル時ニスルハ新シ

トシタリ。俳諧ハ埋木（明曆）又ハ留守ヲシテ茶曰ヒサヤ。録山の井

（寛文）住吉ニテ。松屋ノ音ヤ茶ヲひく神ノ留主後撰表曲集

（寛文）「口カノ會ヲ催ス十月ハ神ノ留主トシテ茶ヲヒハツリ」

（三）述ス女ノ名ヲクニテ際ニアリテおぢヲヒクトシテ（藝者者藝人ニ移

テ此ノ語ヲ湯女ノ名ヲ者者客ニ供スキ散セ茶ヲ碾キレシタルトホ

湯女ノ新吉存ニ入テ述ス女トシテ（散セ茶ト呼ビキ）遍ク津州ノ各ノル

ナルベシ

10 根岸 委むらや製

おぢチヤらかき 他ニ「愚垂ハおぢヲ見ス」ナブル。嘲弄ス。

おぢチヤのハ「法茶壺」茶壺敬レ語ヲ（三）徳川幕府ノ命ニ因テ山城

ノ宇治ノ清物茶師ノ調製セタル末茶マテヲ佃ル。茶壺幕府ヨリ幕府

ハ献上スルモノナリバ（茶師ノ條ヲ見テ）

鄭重廉重ニ招キレ運送ノ道中ニテハ行合テ旅人ニ土下座セシテ嚴

ニ置ナルモノナリキ

おぢチヤん（名）ハ江戸所マノ火見様子ニ半鏡ヲ懸ケリ火火遠近ニ因テ

ニ打ミ打ミ打ミ打ミ乱カ緩急アリ。鐘火ノ報ニ極メテ緩クニ打リ終リノ

良ヲナス。事ノ終ル事ヲエフ俗語。失敗ノ意ヲ伴フ（東京）

おぢチヤ「乙酉キントトリ。おぢチヤノ條ヲ」

おとつし「湯手附」(一)貴人ノ手ヲツケタル侍女ナド。其ノ旨長ニ「湯」セシメル
女。「湯手附湯中煎」(三)歌骨牌ヲ取ル時談出サセテ歌ト異ナル
解ニテヲ編シテ花ノ口討アリ。

おとつし「湯手附」(一)貴人ノ手ヲツケタル侍女ナド。其ノ旨長ニ「湯」セシメル
女。「湯手附湯中煎」(三)歌骨牌ヲ取ル時談出サセテ歌ト異ナル
解ニテヲ編シテ花ノ口討アリ。

おとつし「湯手附」(一)貴人ノ手ヲツケタル侍女ナド。其ノ旨長ニ「湯」セシメル
女。「湯手附湯中煎」(三)歌骨牌ヲ取ル時談出サセテ歌ト異ナル
解ニテヲ編シテ花ノ口討アリ。

おとつし「湯手附」(一)貴人ノ手ヲツケタル侍女ナド。其ノ旨長ニ「湯」セシメル
女。「湯手附湯中煎」(三)歌骨牌ヲ取ル時談出サセテ歌ト異ナル
解ニテヲ編シテ花ノ口討アリ。

おとつし「湯手附」(一)貴人ノ手ヲツケタル侍女ナド。其ノ旨長ニ「湯」セシメル
女。「湯手附湯中煎」(三)歌骨牌ヲ取ル時談出サセテ歌ト異ナル
解ニテヲ編シテ花ノ口討アリ。

根岸 表むらや製

云へり。家賀賀湯伽(寛延)大坂天満宮境内、おとつしノ品玉

「京都へ玉」^{おとつし}カ知ラス。品玉ハ「おとつし」^{おとつし}ト云フ。天神ノ内

おとつしが「湯手長」禁中下級ノ女官。湯膳ヲ湯次ノ間マテ運ブ
ヲセキル。

おとつし「湯手長」禁中下級ノ女官。湯膳ヲ湯次ノ間マテ運ブ
ヲセキル。

おとつし「湯手長」禁中下級ノ女官。湯膳ヲ湯次ノ間マテ運ブ
ヲセキル。

おとつし「湯手長」禁中下級ノ女官。湯膳ヲ湯次ノ間マテ運ブ
ヲセキル。

おとつし「湯手長」禁中下級ノ女官。湯膳ヲ湯次ノ間マテ運ブ
ヲセキル。

おとつし「湯手長」禁中下級ノ女官。湯膳ヲ湯次ノ間マテ運ブ
ヲセキル。

おんき 御天叙利 (二) 快晴ノ空ノウルハシヤク云フ語 朗晴

(三) 俗ニ金鎧ヲ所持セヌ (晴) テカラク (尤) 意ナルベシ

(三) 詐謀師ノ一種ニ御天筆師ト云フ路ナリ田舎人ナド提 (七) 拾物シタリ

介 (八) セムトテ種々テ手段ニテキリ (九) 其人ノ金鎧ヲまきあげテ隠ルナリ

晴天ノ日ニスルノ其時名アリ

おいてしヨ 千盤四ノ婦人語

おいてしヨはらか (一) 御手弱ニてひどくノ交。テユル人ノ仕向クノ寛大ナラ

おんき (二) 御手弱ニてひどくノ交。テユル人ノ仕向クノ寛大ナラ

おんき (三) 御手弱ニてひどくノ交。テユル人ノ仕向クノ寛大ナラ

倭ヲ見ヨ

おと 音 (一) 音ノ通カ織 (二) ありきぬいたはし (三) 音ほし

(二) 物ノ音當リ重キテ起ル一種ノ性モ人ノ空ニ在ニ傳リテ耳ニ聞エシ。コエ。

万十四 都武賀野ニ鈴ガ花ニ聞エ可キ思大 (此) 殿ノ仲子ト鳥

狩 (六) 十 (七) 行ク水ノ音モサヤケク (八) 字鏡 (六) 十

百葉聲 波社於止

(三) 動物ノ聲耳。万十三 (ホト) キス鳴ルノ音ノ遠ケサ (古) 今ノ秋上

鳴ク鹿ノ目ニ見エテ音ノサヤケク 蜻蛉日記 イト奥山ノ鳥ノ聲

モセヌモノナレバ甚クニおとセヌ 千載ハ 西華旅 小社深キ雲居ノ雁ノ

おとスナリ

(三) 人言 (ヒトコト) ヲハサ。風聞。万二 (三) 音ノミモ名ノミモ絶エズ (四) 七 (音) :

聞キ目ニイマタ見タ吉野川六田ノ渡ヲ今日見ルカモ

(四)オトツレ。タヨリ。竹取「夜書待」キマフ。年越元マチおとモセス

おと(名)「一列」(年若ル義)(二)男又女ノ兄姉ニ對シテ後ニ生レルモノ。

イロド。イロモ。オトウト。イモウト。古事記上三「妹石長^{母長}木花

佐久夜思美神代紀上「兄^{コオト}弟^ニ」應神紀。皇位^イ弟^ニ姫

万九^ノ哀^ニ死^ス作^レ歌^ハ「ハシムカラ^{オト}命^イ」

(三)年ノ若キコト。「^{オト}相^タ撮^ル女^ヲ」弟^ニ橋^ノ媛^ノ弟^ニ財^ニ取^ル女^ノ(若^キ常^ニ

以^テ置^キ命^ト若^キ新^レ女^ト同^シ)

おと「於^テ花^ノ友^ト部^ト清^ク果^シ右^ニ傳^ヘ宣^ハ四^ノ山^ト」楚^ノ人^ノ謂^フ境^ヲ於^テ克^ク

おと「^一列^ノ女^房詞^{ナリ}上^ニ」^一列^ノ女^房詞^{ナリ}上^ニ

おとえは「清^ク轉^シ望^ミ」えは「條^ヲ見^ル」

おと「うさま 清^ク又^ハ攝^ル音^ハ便^ニ父^ノ上^ニ」

おと「うと「弟^ノ人^ハ弟^ノ人^ノ音^ハ旅^ノ人^ノた^ハひと^ト商人^ノあ^ハまうと」

(二)「弟^ノ人^ハ男^ノ女^ノ通^ジテ云^フ」イロモ

古今^ノ十七^ノ「妻^ノおと^トと(妻^ノ妹^ヲ持^テ侍^リケル^人」祝^ノ贈^ルトテ

源^ノの^女喜^セ七^ノ女^御おと^トと^と冬^ノ月^ニ社^ニ也^トニ^コメ^テアラ^メ

華^花見^ルは^な夢^ノ一條^ノ大^臣清^子中^將ヲ^ゾ我^ガ子^ニ

空^徳樓^上下^ニ中^將其^清おと^トと^と四^位少^將

△シタ^ノヒテ此^北方^ノ清^{おと}と^と西^ノヤ^ダマ^ツリ^タマ^ヒニ^テ於^テ止^ム止^ム

(三)傳^ラ田^カナル^取オトト。傳^名抄^ニ七^ノ男^子後^生為^ス原^ト

漢字ヲ
写シ

おとどと天殿屋(おとどと修見)

五月、騎射の時、左近侍右近侍馬場ニ高級武官ノ着座

おとどと源の

おとどと源の... 殿屋トテ左右馬

場ニアリ五月、騎射の時中少将ノ着座スル所也

今昔廿四、右近、馬場ニ五月六日ヲ行ヒテ、存存堂平ト云

人オ料ニマリテ大匠ノ着キタリ云

大匠、又...

...

...

おとどと

おとどとマヒ、テ後ハ、アリシヤウニ御簾ノ内ニモ入レタマハ

ズ一元服シタルナリ

三一族人ノ長頭大小名ノ家老宿老年寄蝦夷ノ酋長

ヲおツてなト云フ。林逸節用宿老

四長崎ニテ町役人ノ名、乙名ト記ス、一町ニ一人ヲ置

キ、町内百般ノ事ヲ司リ、月行事ヲ立テテ勤メ、長崎奉
行ニ屬ス。

今昔廿八... 指出テ云云

入女成おみふ

以社雄技

了ト云フ一人

内ニ入

取夷ノ酒

曾我の兄弟本立、其中、おとをしき雄武

おととぶさ、兄弟草へはるの女に侍ら見よ、菊、異名。

おととぶさ、兄弟御へ六(徳)侍ら見よ、他人、弟、敬種、合、弟

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

道
自
カ

おととぶさ、訪問(八)おととぶさ、前條ノ御音ふと同じ、人家、ものまう

おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ

源。寄生、おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ

おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ

おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ

おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ

おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ

おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ

おととぶさ

おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ、おととぶさ

10 根岸 表むらや製
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

10 根岸 表むらや製

(1)

10 根岸 表むらや製

11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

(1)

10 根岸 表むらや製

おどろきしり 白口 鷲入一深く鷲入。

おどろしり 形ニ 恐出 おどろしりニ同じ。閑西ノ語。(倭訓栞中編)

おどろ 荆棘ニおほとれノ約轉、をれかむをるむ(拜)はたれほと

ろ(斑) 林正樹ノドノ繁リテ葉取立キタル地。藪。(静岡ニ竹枝竹葉ヲおどろ

字鏡ニ五ナ 藪也夫又於止呂名義抄 雜部「棘オドロ」

秋草子、三ノイモ 夢荊オドロ同

自由花「アヤ」新古今其 神社「春日也」
路ノ増外

風雅十五 雜上「初草ハ下ニ萌ユト片岡 おどろカキノ雪ハ消エテクニ

増後ノ後鳥羽院 奥山ノおどろカ下モ 踏ミワケテ道見世ノ人ニ

知らせ

10 根岸 表むらや製

おしふる 他下ニ 押蘇オシヒカス オシワケ。オシヒカス。

三ノ一 万一七。大和ノ國 押奈戸テ吾レヨリ居シ (天皇ノスヘテ知レメテ意)

三ノ二 万六十七。印南野ノ淺茅 押蘇左ノ持ル夜ノケナカクアル家ニ 促ハヌ

三ノ三 万四十七。婦負ノ野ノ薄於ニ奈倍陸ル雪ニ宿借ル今日シ悲シクオモハユ

枕草子三ノ一。花ノ木トス散リテ、おしふるへん 緑ニナリタルニ

蜻蛉日セ。先ニ焼ケニシテ 此度ハおしふるナリケリ

源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三

源。相馬無 源方ノ人々世中ニおしふるタリマヲ 擗リトノスガリテ (並)

源ナリ又 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三

源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三

源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三

源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三

源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三

源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三

源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三 源ノ三ノ三

下中

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

おとろがし

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

おとろがし

又

(三) 眼ルヨリ賢ク古事記上廿七「地嘉鳴故其所授大神聞」

而之々皇仁紀五年十月「天皇枕皇后膝而直授皇后云々眼

淚之其落帝面」天皇「語」皇后曰云々

(左言「オトロガシ」)

万四「夢」道「苦」シカリケリ「賢」而格キサレトモチニ「觸」レキ

源の若草「マタおとろがし」バビナ「イテ」御目サシ「聞」エム「枕」草子

「月」次「海」おとろがし「見」出スモ「カレ」シ「海」見「テ」

オトロガシ

又

侍リルモノヲ思ヒテおとろがし申サレバ

オトロガシ

10 根岸 委むらや製
 11 根岸 委むらや製
 12 根岸 委むらや製
 13 根岸 委むらや製
 14 根岸 委むらや製
 15 根岸 委むらや製
 16 根岸 委むらや製
 17 根岸 委むらや製
 18 根岸 委むらや製
 19 根岸 委むらや製
 20 根岸 委むらや製

上に(三)圓(八)傳名抄(九)二十(十一)鬼於雨或說云隱字音於雨說也

鬼物隱而不欲顯形故俗呼曰隱也人死魂神也トアリ支那ニテ鬼ト云
 人、迷主(主)身(身)古言ニミテ去又ハ此のト云フ夜米ト云ト去ハ此

意コ移レ又ト云ホニ身(身)中古ニ出来シ後ニ昔(昔)鬼ト訓
 上ルル(上)追記(上)

易經(易)載鬼一車(車)疏(疏)鬼魅(鬼)五(五)怪異之甚也(甚)史記(史)五字(五)記(記)精鬼(精)

註(註)人面獸身(人)四足(四)好(好)恐(恐)人(人)ト云フ(ト)濕(濕)鬼(鬼)恐(恐)心(心)ト云フ(ト)

論衡(論)訂鬼(訂)鬼者(鬼)老物之精者(老)

神代紀(神)上(上)形ヲナシ(形)人ヲ言(人)怪物(怪)名(名)

(倭)名抄(倭)鬼火(鬼)於通(於)此(此)ト云ル(ト)是(是)也(也)

先ヅ
御前入見御事書 鬼吞ヲイタシテ云々 同卷、御湯ヲ天衆来ノ
座ノ御前ヨリ見ユル所ヲ鬼飲ヲレテ持參云々

鬼取役ノ侍見見 白山公治家記録(伊達政宗)

記録(伊達伯耆) 附尾、將軍秀忠、政宗、外侍侍時、侍臣由藤

外記「鬼ヲトテ上ニルベシト申サル云々、政宗、ホドノ者ガ御成ヲレテ自身御膳
ヲ上ニ上ルホニトコロニテトナシ 御膳料 壬午年南見 日本ノ御カケテ毒ヲトテ

以テ殺シ奉ルベシト云々、思ハズ」

おにのみ 鬼飲 おにのみ 條

10 根岸 表むらや製

おにし 御西一向宗ノ信者ノ西本願寺派ノ敬稱。御東本願

寺派ヲ御東トシテ

おにしば 鬼芝 (結縷草)ノ條ヲ見ヨ

おにとりやく 鬼取役 (鬼食) 鬼飲ノ役 毒試ノ役目

徳川氏ノ初世ニ將軍ノ膳部ノ毒試ヨスル役目。後ニ膳奉行トシテ

東照宮ノ御事記附録ナシ。供御聞コシメス。御にとりノ役ヲシテ

置カレ後々々テモ三河ノ藩代ノ者モテ其役ニ充テラル云々おに

とり役トシ今世ノ御膳奉行ナリ實ニ水鏡文ノ頃マデハカク唱ヘシナリ

おにのくび 鬼首 大手柄ヲレテリト云フニ意ヲ、鬼首ヲ取ツト云フ

おにの六 鬼子 世表虫ノ異名ナリト云フ八雲抄抄

枕草子 世表虫ノ鬼ノ生カト云ル因ニ世ニ云ミのむし侍ヲ見ユ

おににかまぼろ 鬼金棒 鬼ニ金棒ヲ持タスル。強キニ勢ヒラ添ル

舟作抄 史記抄(文明)十八三 勢ヲ得ル鬼ニかまぼろ 棒ノ

吾吟我集(慶安)七 軒ニ算ク瓦ヲトメテ刺ヌ新ヤキツヨク見ユル

鬼ニかま棒

おにのやから 續断(鬼ノ矢幹ノ義ニモアルカ) 草ノ名をとり六さうノ名

字鏡 續断 於雨乃也加ヨリ(本草和名 傳名抄 同)

おにのやぶツ 鬼念佛 強ニル者ノ上ベニ云ミテ 唱ル 大津繪十

おにの鬼ノ實ニ念佛ヲ因スル是ナリ

根岸 表むらや製

おにし 本ニル

おににおし 鬼鬼

夜更ノ如ク暴ク恐モ情ヲ無ク心強ク 殘唐源三

十八夕霧 三ナラウタゲニモ宣ハセナス 姫君カタノ

トおにおにしう侍ルサガナモノヲトラ

鬼子ノ侍女ノ

九 我ガ心鬼ノ

直ネテおにお

海賊ノ

ムカタナシ

おにのはは 鬼波女(三) 鬼女ノ老婆 女遣カ身ノ身 婆(三) 老婆ノ

發醜キ性何具ノモノ

おにのこ 鬼子 世表虫ノ異名ナリト云フ 八雲抄抄

枕草子 世表虫ノ鬼ノ生ケルモノト云ル 因ニ海ナラムミメシク侍ヲ見ヨ

おににかまぼう 鬼金棒 鬼ニ金棒ヲ持タスルヲ 強キニ勢ヒテ示ス

舟作抄 史記抄(文明)十八三 勢ヲ測ルニ鬼ニかまぼう 棒ノ

吾吟集(慶安)七 軒ニ算ク瓦ヲトメテ刺ス 軒ヤチツヨク見ユル

鬼ニかま棒

おにのやから 續断(鬼ノ矢幹ノ義ニモアルカ) 草ノ名をとり六さうノ名

字鏡 續断 於雨乃也カヨシ(本草和名傳名抄同)

おにのやぶツ 鬼念佛 強鬼ル者ノ上ニ云ミテ 大津繪ナ

トニ鬼ノ實ニ念併テ因スル是ナリ

おにのろを 鬼留守 主人親方ナド恐ルニキ者ノ居ラヌ間ニ奴婢ノ子ナド

賞ギテ自遊スルヲ 鬼の留 洗濯セヨト云フ 大江ノ酒類 童子ノ侍女ノ

衣洗ヒト云フコトヨリ 起ル 後撰妻曲集(實文)九 我カ心鬼ノ

和又間ニ洗濯ヲ欲垢アリテ隠レヨク有セシ

おにし 形ニ 鬼 大人ノ数ニ 鬼ノ如シ 累クオソロシ 重ネテおにお

にしと云フニ云フカ強ム 源世玉萬 海賊ノ舟ニアラセヨ 海賊ノ

ヒタフルナラムヨリ 彼ノおにしき人ノ追ヒキルニヤト思フニセムカタナシ

おにおにし(形) 鬼鬼 おにし(鬼)ノ條ヲ見ヨ

おにはは 鬼世(三) 鬼女ノ老婆 女座ノ草ノ鬼婆(三) 老婆ノ

發醜 性何男ノモノ

おにみぢ 鬼湯島 湯影石 質 粗キモノ

おに、ニソ 鬼味噌 (たうがら) 味噌 天竺ニビシは同類

味噌 艾子ナドノ辛味ヲ加ヘテ焼キタルモノ

太平記三十三 八幡託直ノ條ノヤチヨリ、唐橋ヤ、夢ノ路、焼ケレ

コソ 桃井殿ハ 鬼味噌ヲエシ (桃井直常ノ敗軍失敗ヲ云ヘリ)

おにひサ 鬼髪 鬘ノ條ヲ見ヨ

おに、フクレニ 鬼服薄 (ゴウキ) 云々 (京都)

おには、そと 鬼外 (まめまきノ條ヲ見ヨ)

(Faint handwritten notes in the left margin of the right page)

雷 イイトイミジラ 鳴リ雨モイタラ降リケレバ

おにひとち 鬼一口 鬼ノ物ヲ一呑ニスルコト

伊勢第六段 アバラナル倉ニ女ハ奥ニ押シ入レテ云々 夜モ明ケテト思

ト心、居タリケルニ 鬼ノヤ一口ニ食ヒテケリ 男ハ貴女ヲ食ヒテ

走リケル 鬼 藤原國經ニ取返サレタル云々 本行經ニ未タ死

鬼却奔人命 一入鬼口ニ迷皆食盡セシナドニ 櫻レルナム 謡曲山

焼 古ノ鬼一口 雨ニ降リ 雷鳴リサレキオソロシキ 其夜ヲ思ヒニ

おにヤ 鬼 役目 おにとりやくノ條ヲ見ヨ

おにびし 鬼 草ニ著シ 一種 敵ノ殊ニ 鏡キモノ

お、ゆる 浅瀬 漆ヲ行クニ 條マレキ 其ノ故談

(Faint handwritten notes in the right margin of the left page)

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

欽明^紀 其^ニ甚^ク稱^ス嘉^人之心^ニ 舒^明紀^ニ 我^等父子^ノ

其^ノ感^歎

其^ノ感^歎

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

入^ル浴^シタル^ヲ田^舎人^ヲ稱^スル^也。

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

自^レ慢^ス 自^レ下^ニ 己^ニ認^ム 己^レ自^ラ己^レ心^ニ醉^ル 自^ラ好^ム 誇^ル 我^レ復^ス

自^レ慢^ス 自^レ下^ニ 己^ニ認^ム 己^レ自^ラ己^レ心^ニ醉^ル 自^ラ好^ム 誇^ル 我^レ復^ス

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

神武^紀 諸^ノ皇^子對^シ曰^ク 我^レ亦^ハ恒^ニ以^テ爲^ス念^ト 己^等オ^ララ

舒^明紀 我^等父子^ノ

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

おの(代)己^ニ自稱^ス名詞^ヲ我^レ也^ト。

場^ノ所

おのづからかかろし 已惚鏡 ひとろかみ 異名 其條子見ヨ
らぬげれ かがみ

おはあさん 三 御祖母 稱 音便 (三) 老女 尊稱

おはいはい 三 何事ヲ聞クニモははト肯ケテ居ル者 渾名 追従者

おはごろろば 津葉里五重 おはごろ 作月餅 汁ヲ容ル器

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

おは 津葉菜 婦人 津葉菜

おはせがみ 津比見 寄居 異名 其條子見ヨ

(Faint note: 形 奇異 名 トルカ)

おは

木 津葉 度々 スル 稱 習 癖 吐言カおは 下 若は 津葉 落

おはごま 御翁車 小 稱 子 下 若 名 切 下 下

(Faint note: 御翁車 糸 籠)

(Faint note: 三 葉 十 番 下 三 葉)

おは 意 三 葉 三 葉 三 葉 大坂 其 居 詞 三 仙 傳 枝 藪 三 葉 三 葉

(一) 度々 三 葉 三 葉 得意 枝 藪

(三) 癖 三 葉 三 葉 比 言 カ おは 下 若 名 切 下 下

おはさうを 自在変「浄屋」(おはさむとを(おはさむは活用アリ)奥)

おはさむむむ(行)可(むむ)音便也 然(未)来(ル)現(在)

二用井ル^ル我が身カクテ候(は)毛程(ト)ナド(ス)カ(ル)

おはさむ^{オハサム}オハシマス。物苦(シ)ウおはさう(モ)ラム

源。寄生^{セキ}清(ケ)ニおはさう(ガ)所(子)供(ノ)日(ノ)橋(姫)ニ(サ)心(モ)感(ヒ)テ

取(ガ)おはさう(ガ)我(ガ)泉(式)部(日)也。空(耳)聞(キ)おはさう(ガ)更(利)日(記)

「又(シ)々(々)調(度)取(リ)おはさう(セ)ヨ(ヤ)」

おはさむ、^キ細(蟬)彈(ノ)女(見)後。

おはした 浄(寺)王(半)下(女)子(亭)云(リ)後

おはした 浄(寺)王(半)下(女)子(亭)云(リ)後

おはす 他(口)豐(豊)業(ノ)敬(語)世(ヒ)タマフ。

継体紀七年九月、大(君)於(鹿)野(細)屋(細)形(形)新(新)帯(帯)三(諸)

神(ノ)萬(三)甘(甘)守(守)備(備)三(諸)神(ノ)帯(帯)為(為)明(明)日(日)香(香)河(河)

(川)山(山)下(下)烟(煙)ヲ(流)流(ル)リ(万)七(七)新(新)竹(竹)山(山)帯(帯)為(為)深(深)細(細)谷(谷)

おはもじ 浄(は)文(文)字(字)ハ(は)取(取)つ(首)首(首)恥(恥)し(ま)と(ノ)婦(婦)人(人)後。

油(槽)實(永)直(直)作(作)先(先)ツ(兼)物(物)立(立)テ、色(色)メ(ク)フ(リ)カ(タ)キ(テ)扇(扇)ノ(歌)

おはもじヤ

おはやう(副)浄(早)ハ(有)り(か)た(う)お(め)ん(た)う(と)同(類)後(後)

浄(早)お(は)や(く)お(さ)り(ま)を(音)便(畧)朝(早)ク(人)會(ヘル)時(按)按

ヌル^ルヤ

今皇が
後呂ヲ
禱祥ヲ
おひよ
云フト承
おひよ
轉ナル
麻布
ガ元ニシテ

おひよら 葦白公たちおひよ見ヨ

おひえ 雨冷 麻布 身体 冷 葦白公たちおひよ見ヨ

麻布ノ夜着ヲ此の物ト云フ 葦白公たちおひよ見ヨ 北國ハ冷ネキナリ

麻布ノ夜着ノ女房詞 葦白公たちおひよ見ヨ 又麻布ノ綿入ノ服 布子

慶長見聞集三ノ麻布ヲ色ニ染メ綿ヲ入シおひえト云ヒテ上ニ着セシ

也云々 綿ヲ多ク入レテ夜ノ物ト夜着ニスル 是ヲおひえト云ヒテ此の物

ト云フツク 此詞皆公家ヨリ出テタリ

後撰夷曲集(寛文)の「負シキガ寒シト云ヒテ冬ノ日ニ幾ツ着

又トおひえナリ」女重寶記(元禄)「湯身衣」狂言記結遠三

「煤竹」の「めた」織物ノ手書 此女貞

「籬倉ノ上臈」 10 根岸 表むらや製

おひしき 運敷取引所 相場ノ高買ノ證據金ノ追加レニ

徴收セラル、云

おひしけどう 運重藤 石ニテ漢しけどうノ條ヲ

おひひろはだか 學廣裸ハはだかハほとけノ訛ナリ、ほとけはたれ(斑)ア

け、あか(赤)ナド、伊豆ノ玖須美ニテハおひろはほとけト云フ

マヒロカト、衣服ニ帯セラル、

おひよがふ 自口 追次ハ花ガカ(次)ノ條ヲ見ヨ 思ヒタマヘ、志シスル

追ヒツク。オヒシク。オヒツク。源ノ少女。一人知リス。おひよがふ 腹ノ付カニ

又レノ日 宗長(手記)止 早雲ノ陣並形着陣ノ敵退ツ

ト見エキ おひよがふ 一夜野陣云々 葦白公たちおひよ見ヨ

おびと首オビトノカミ「大人約」(二)長官ナガウヂ。部曲ベウキョクノ長チカ。古事記上コトギキノウ十三「速須佐之

男命云々喚其足名推神オノノミコトノミヤコトヲコトヘテオノミコトノミヤコトヲコトヘテオノミコトノミヤコトヲコトヘテ

景行代キョウコウダイ「村之無長是之勿首ムラノナシナガニシテオノミコトノミヤコトヲコトヘテ成務代ナガヒコトノミヤコトヲコトヘテ。縣邑置首シマノミヤコトヲコトヘテ」

清寧紀セイエイキ「緒見屯倉首オノミコトノミヤコトヲコトヘテ忍海部造ニシノウミベノツクリ細目ホソメ繼体代ツグミタリノミヤコトヲコトヘテ。三「河内」

御前ミマエ「(三)人ヲ敬テ呼フ語。元祿紀二年二月。忍坂大

姫ヒメ。關ツル。國造クニツクリ。首カミ也。余不オノミコトノミヤコトヲコトヘテ忘ワスレ」

言諸職コトヘテ奉仕ホウジノ奉止ホウジ。尸カネ。名ナトハル。末武代スエタケノミヤコトヲコトヘテ。吉野首ヨシノノミヤコトヲコトヘテ

縣姓シマノミヤコトヲコトヘテ。音便オノミコトノミヤコトヲコトヘテ。姓カミ以録カミ。首カミノ尸カネ多オホシシ。

神代紀上カムヤマトノミヤコトヲコトヘテ。忌部首イミベノミヤコトヲコトヘテ。祖太王命ソトノミヤコトヲコトヘテ私記シキ「首カミ諸オホシ」於

比此ヒコト。天明紀アキラケノミヤコトヲコトヘテ。本ホ。津ツ。

おひとよし 浙人セツノヒト好人物オホシノヒト。温順ユヅル。物モノニサカラムヲ。(婦人ノ語)好人物

おひとさま 浙セツ。繼ツグ。極ツク。繼人形ツグノヒトノカタ。女メ見談ミタナヒ。

おひとち 自オノミコトノミヤコトヲコトヘテ。生ナマ。成ナリ。生ナマ。口クチ。三ミ。首カミ。千チ。ユク。成長ナリトシス。

空穂ソラホ。嵯峨院サエエノイノ。カノ袖スエビ。君ミコトノヨク。おひとち。タメヒシヲイカテ内ウチニ冬フユニセテレガナ

おひとめく 自オノミコトノミヤコトヲコトヘテ。追ツグ。拔ヒキ。おひとち。同ドウシ。

おひとがひ 追ツグ。懸ケ。追ツグ。次ツギ。ヤチ。懸ケ。フ。

おひとく 他オノミコトノミヤコトヲコトヘテ。下シタ。二。追ツグ。追ツグ。追ツグ。ヒ。リ。ソ。クル。追ツグ。排ヒ。ス。

おひとち 生ナマ。世ヨ。生ナマ。世ヨ。生ナマ。世ヨ。

空穂ソラホ。有アル。上ウヘ。おひとち。天アメ。知チ。見ミ。松マツ。新アタラシ。イ。ト。合アヒ。ミ。

おひばきみ 帯挾根附（同じ） 直徳文集 印籠 遠袋 帯挾 珊瑚

珠緒止（嬉遊笑覧三）

おひばい 追羽子（羽子） 條（見）

おひばね 追羽子（條）

おひのけり 追懐（おひのけり） 條（一）

おひはくろ 追懐（おひまろ） 條（一） 俗語。

おひわり 湯捨（おひまろ） 條（一） 俗語。

おひわり 湯捨（おひまろ） 條（一） 俗語。

おひまろ 湯捨 條 一 俗語

おひものい 追物射（音便） 馳射（おひものい） 馬（乗） 地（表） 射（追） 身（射）

射ルコト 傳名抄（四） 馳射（おひものい） 馳射（おひものい） 馳射（おひものい）

平家（平家） 平家（平家） 平家（平家） 平家（平家） 平家（平家）

長川本平家（平家） 本堂（見） 又（平家） 落（一） 射（取）

とや者共（おひものい） 射（ケ） 盛衰（記） 子（一） 馬（太） 腰（射）

おひせくと 湯百度（百度） 湯（射） 湯（射） 湯（射）

おひはきみ 湯百度（百度） 湯（射） 湯（射） 湯（射）

おひはきみ 湯百度（百度） 湯（射） 湯（射） 湯（射）

おひはきみ 湯百度（百度） 湯（射） 湯（射） 湯（射）

捕手
手トモ

おきて 遣手八千人隊 敵軍前方面擊退して追逃ル後方

捕手捕ルニ捕手ヲ遣テ其レ空前(意あり)木ヲ破テ敵ニ追手捕

手トモ城ノ敵ニ攻メテ(一)敵軍前方面ニ攻メカル一面撃テ後

攻ムルヲ捕手トモ前後ニ攻メテ其レ報テ

若者田集九ニ後三年ニ戦ハ此野ニ必下敵伏シテレシカレテ手ヲバスキ

由下知セシレバ 平家七、破浪山合戦、北南見廻ル捕手ノ勢一万余

騎ニ平家後ヲ敵ニレバニ捕手ヨモ冬ラストヨ思ヒルニ云ニ木前

殿大キヨリ 隣ヲゾ作リ合セタマフ盛衰記三十四、法住寺合戦、木

曾義仲云、西川へゴ追手ニトラ向ヒタルニ云ニ西川大キ攻メカル云ニ

東ニ捕手待チタル云ニ

鶴
トモ

(三) 轉ジテ城ノ表門ノ特大門ニ意ヲ寄セラ大キトモ者キ大キトモ云ラ

裏門ヲ捕手ノ捕手トモ云ラ 五妻鏡ノ治承四年八月廿日、衣笠城

云ニ東木戸口大キ盛衰記三十六、源氏勢汰、一石城、追手大

將軍ニ、捕冠者、敵勢云、捕手ノ大將軍ハ九良良鏡

おとと首(おびと)善便(おとと)諸(おとと)おびと條(おとと)

おとと、い、遣物(おびと)の、條(おとと)

おとと、い、御家様(おとと)大坂ヲ西家妻ノ勢、オカニサレ

おとと、い、御家様(おとと)大坂ヲ西家妻ノ勢、オカニサレ

